

二〇一九年度

入学試験問題

I 国 語

(五十分)

注 意 事 項

- 1 開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 試験問題は25ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 解答用紙にマス目(例：

.....

)がある場合は、句読点などそれぞれ一字と数え、必ず一マスに一字ずつ書きなさい。なお、行の最後のマス目には、文字と句読点などを一緒に置かず、句読点などは次の行の最初のマス目に書き入れなさい。
- 5 終了の合図があったら、すぐに解答をやめなさい。

受験番号

--	--	--	--	--

問題は次のページから始まります。

【一】 次の短歌と文章を読み、傍線部 1～4 の中から説明として間違っているものを一つ選びなさい。

A 魂よいづくへ行くや見のこししうら若き日の夢に別れて

B 向日葵^{ひぐるま}は金の油を身にあげてゆらりと高し日のちひささよ
*向日葵…ひまわりのこと

C 洪水^{みづがは}川あからにこりてながれたり地^{つち}より虹の湧き立ちにけり

D ともしびをかかげてみもる人々の瞳はそそげわが死顔^{しにがお}に

郷土神奈川を代表する歌人として秦野出身の前田夕暮（1883～1951）を挙げよう。前田夕暮はその生涯に四万首にも及ぶ膨大な作品を残しているが、今回代表作四首を右に掲げてみた。この四首を見ていくと明治・大正・昭和の三時代に渡って活躍した歌人だけに、その作風は変化に富んでいる。だが、同時にある共通する傾向を見てとることもできると考える。

例えばAの歌は、夕暮自身の精神を「魂」と表現し、その「魂」が「うら若き日の夢」から遠く離れてしまう、つまり自らの青春が終わってしまうさまをロマンティックに描写しており、作者夕暮の視点は現実の自分が生きている「下」から魂の行く先である「上」へと移動している。著名なBの歌では「ひまわり」の印象的な描写から、その「ひまわり」を照り輝かせている太陽へとまなざしを「下」から「上」へと移行させている。Cの歌では洪水で濁流と化した川を描写したのちに視点を地面（＝「下」）から雨上がりに輝く「虹」（＝「上」）へと上昇させており、濁流や赤土から「虹」への転換は色彩的にも美しい。

Dの歌は自分の死後を想像した夕暮最晩年の作品である。ここで夕暮は自分の「死顔」を「上」から「下」に見下ろす家族や友人を描写しており、これは同時に死んだ夕暮自身が頭上の家族や友人たちを見上げる「下」から「上」の構図でもある。以上のように今回例示した歌人前田夕暮の諸作品から「下から上」（あるいは「上から下」といった、「垂直のまなざし」を読み取ることができるのではないだろうか。

問題は次のページにつづきます。

【二】 信濃の国、筑摩つくまの湯の辺りに住む人が、夢で「明日の午うまの刻に観音が湯あみをする。三十歳さんじゅうさいくらいの男で、ひげが黒く、あやいがさを着て、胡籙こりく・

弓を持って、紺くろの襖あはせを着て、夏毛なつむけの行膝ゆきかばき、白足袋しろあしふくを履いて、葦毛あしむらの馬に乗って来る者を観音と思いなさい。」というお告げを受けました。その話を聞いて多くの人が集まり、様々な用意をして待っています。次の文章はこれに続く場面です。読んで後の問いに答えなさい。

やうやう未ひだりになるほどに、ただこの夢に言ひつるに、つゆ違ちがはず見ゆる男来ぬ。顔よりはじめて、夢に言ひつるに違はず。よろづの人、にはかに立ち

て、ぬかをつく。この男、大きに驚きて、心も得とざりければ、よろづの人に問へども、ただ拝みに拝みて、そのことと言ふ人なし。まめなる僧そうの、手を

すりて、額ぬかにあてて、拝みたるがもとに寄りて、「こはいかなることぞ。おのれを見て、よく拝み給ふは」とよこなまりたる声して言ふ。

この僧、人の夢に見えけるやうを語る。この男、言ふやう、「おのれは、さいつころ、狩りをして、馬より落ちて、右の腕うでを打ち折りたれば、それゆ

でむとて、まうで来たるなり」と言ひて、と行きかく行きすれば、人々尻しりに立ちて、拝みののしる。男、し侘わびて、「わが身は、さは、観音にこそあり

けれ。ことは、法師になりなん」と思ひて、弓、胡籙、太刀、刀を折りて、法師になりぬ。かくなるを見て、よろづの人、泣なきあはれがる。

ふいに、見知りたる人、出で来て言ふやう、「あはれ、彼は、上野かむつけにいまするわとうぬしにこそいましけれ」と言ふを聞きて、これが名をば、わとう

観音とぞ言ひける。法師になりてのち、横川よがはにのぼりて、かてう僧都の弟子になりて、横川に住む。その後は、土佐の国に往にけり。

〔古本説話集〕より 改変した部分があります。

※1 胡籙…矢を入れて背に負う道具。

※2 襖…狩衣。動きやすい衣服。

※3 行膝…鹿・熊・虎などの毛皮で作られ、腰につけて前面に垂らし、脚や袴をおおうもの。

問一 —— 1 「心も得ざりければ」の意味として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 気味悪く感じられたので
- 2 何の説明もなかったので
- 3 わけが分からなかったので
- 4 心ここにあらずだったので
- 5 気持ちがこもっていなかったので

問二 —— 2 「人々尻に立ちて、拝みののしる」という様子について説明したものととして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 人々が直に男を見ようと次々に並び始め、それぞれが思い思いに拝んでいる様子。
- 2 全く高ぶったところのない男に感激し、人々がさらに腰を屈めて拝んでいる様子。
- 3 男が移動すればその後について回り、人々が大騒ぎしながら男を拝んでいる様子。
- 4 途方に暮れた様子の男を尻目に、人々が男に向かって大声で祈禱きとうをしている様子。
- 5 観音に変じる様子を見ようと、人々が男の後ろまでぐるりと取り囲んでいる様子。

問三 —— 3 「泣きあはれがる」について説明したものととして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 法師になるために大事な弓や太刀を折った男を称えている。
- 2 法師になるという決断がありがたく尊いので感激している。
- 3 成り行きで法師になると決断した男を気の毒に思っている。
- 4 自分たちの力で一人の男を救ったことを誇らしく思っている。
- 5 お告げ通り観音が現れるという奇跡に立ち会えて喜んでいる。

問四 本文中の「男」について説明したものとして当てはまらないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 夢で告げられた時刻よりもやや遅れて現れた。
- 2 観音らしい高貴さはなく、変になまった言葉で話した。
- 3 先日狩りで怪我をしたため、湯治にやっけて来た。
- 4 人々があまりにも拜むので、困ってしまった。
- 5 その容貌から「わとう観音」と呼ばれるようになった。

問題は次のページにつづきます。

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学校から大学まであるS学院高等部に中学から通う江美利は友人が少なく、高等部から入学してきた竹田しづくとようやく仲良くなった。江美利の父は画家でハーフなのだが、フランス人の祖母の面影が全くない純和風な風貌をしており、江美利はそんな父親に似て地味な容姿のうえに暗くてももしろみがない人間なのを自分でも知っている。江美利にとって、おとなしくてお人形みたいに美しい顔のしづくは唯一の自慢の友人なのである。

チャイムが鳴り、江美利は勢いよくトイレのドアを開けて廊下へ出た。教室ではすでにしづくが席についており、物思わしげに、怯えたように、窓際の席まで前進する江美利を見ている。

江美利の正面、窓の向こうに丘。てっぺんに光。昨日と同じ明滅。「け、んきて、すむ」。「元気なわけあるかー！」

江美利は吼えた。教室にいたものが驚いて体を揺らし、いっせいに江美利を見る。江美利はかれらを一顧だにせず、まわれ右すると教室を飛びだした。再び階段を駆けおり、一階の昇降口で上履きから革靴へ履き替えると、グラウンドを横切って校門をよじのぼる。ちょうど二年生が体育の授業らしく、なかに奥井先輩がいた気がするが、もうどうでもいい。知るか。体育教師がなにか怒鳴っていたが、江美利はかまわず校門を越え、県道に着地するやいなや橋へと駆けだした。

川を渡ったあたりで息が切れてきて、振り返るが追っ手はない。少し心を落ち着け、丘を目指して早足で進む。

てっぺんに建物があるからには道が通じているはずだ。丘の麓を三分の一周したところで、江美利は車一台が通れるほどの坂道を発見した。丘に巻きつく蛇のようにうねりながら、道は頂上へつづいている。

いつも教室から見ていた白い建物を目のまえにして、江美利は門柱にはめこまれたプレートを読みあげた。

『ルミエール聖母の丘』

建物は会社の寮のようなオモムキで、いくつかの部屋の窓には、干してある洗濯物の影が映っている。エントランスはガラスの自動ドアで、段差のないつくりだった。アスファルトで舗装された敷地内には、白い大型バンが停まっている。全体の様子を総合して判断するに、「ルミエール聖母の丘」は老人ホームのようだ。

靴もお金も持たず、身ひとつで学校を飛びでてきてしまった江美利は、どうしたものか躊躇した。施設内にもぐりこみ、「モールス信号を発していたかたはいませんか」と聞いてまわる度胸はとてなかつた。だいいち、聞いたところでどうなる。「わたしです」「あ、そうですか」以上に会話が發展する余地はないだろう。

強い光に射られ、江美利はびっくりして目を閉じた。

「あんた、もしかしてこれに気づいた？」

しわがれた声が降ってくる。おそろおそろまぶたを開ける。屋上の柵に老女がもたれ、江美利を見下ろしていた。光は老女の手もとから発されたようだ。輝くなにかを握っているのがわかる。

「上がってきな。受付で、篠原の孫だつて言えばいいから」

江美利の感じた躊躇は、最前よりも大きなものだった。老女はにこやかだが、遠目にもド派手だと見て取れる風体だったからだ。うかうかと近づいて大丈夫だろうか。

ふだんの江美利だったら、すぐさま坂を下りるところだが、いまの江美利はなげやりだ。こわいものなしだ。自動ドアをくぐり、受付奥の事務所にいた職員に「こんにちは、篠原の孫です。いつもお世話になってます」と堂々と声をかけ、カウンターにあった「お客さま名簿」に「武村江美利 一名」と記入し、横になったままでも乗れるほど奥行きのあるエレベーターに向かう。「R」のボタンを押し、エレベーターのドアがゆっくり閉まったところで、江美利はため息をついた。

信じられない。なにをしてるんだろう。

屋上に到着すると、篠原というらしい老女が仁王立ちで待ちかまえていた。信じられない、と江美利はまた思った。

老女の年齢は往々にしてよくわからないものだが、篠原は七十代後半ぐらいではないかと思われた。にもかかわらず、スカートは赤いラメのスパンコールがびっしりついたマーメイドライン、セーターは明るい紫と緑の横縞で、真っ黄色のフェイクファーのロングコートを羽織っている。化粧がこれまたすごくて、目ばりはばっちり、つけまつげも二枚は重ねているうえに、頬紅もうっすら差し、唇にはつやつやした赤いグロス、眉毛は往年のハリウッド女優のように虫の触角じみた細さだ。

目がちかちかする。ただ、頭と足もただけは常識（というか良識）の範囲内なのが救いで、銀髪に近い白髪はひつつめて首のうしろでお団子にし、健康サンダルと灰色の毛糸の靴下を履いている。

江美利が篠原の全身に視線を走らせたのと同じように、篠原も江美利を上から下まで眺めて言った。

「どこの学校だい」

「S学院高等部一年、武村です」

江美利という名は名乗らずにおいた。地味でブスなのにエミリ？ と笑われるのがいやだった。

ふん、と篠原が鼻を鳴らした。なにかが不快だったのか、バカにしたのか、単なる相槌なのか、江美利は判断に迷った。居心地が悪くてしょうがない。知りたかったことをさっさと尋ね、早く帰ろうと思った。

「あの一。モールス信号で『元気ですか？』って言ってたの、あなたですか」

「そうだよ。ここに入居してあんまり暇だったから、独学で習得したんだ」

「無線をするわけでもないのにですか？」

「暇をつぶせるなら、なんでもいい」

篠原は細い眉を吊りあげた。笑ったようだった。

「もう二年ぐらい、気が向いた日に発信してたけど、ここまで来たのはあんたがはじめて」

A

しづくの裏切りを思い出し、江美利は怒りを燃料に勇気を燃やした。

「授業中に気が散るので、やめてもらえませんか」

いつもなら、こんなことは絶対に言えない。「それに私、ちっとも元気じゃないんです。そんなときに呑気な信号を見ると、いらいらするから」

「元気そうに見えるけどねえ」

篠原はあきれたのか寒いのか、ちょっと肩をすくめた。コートのポケットから煙草たばこを取りだし（江美利には銘柄はわからない）、掌で囲うようにしてライターで火をつける。

白い煙が流れてくる。ほのかに甘い香りがした。

篠原はポケットに煙草を戻すついでに、今度は携帯電話を引っ張り出した。ダイヤモンドみたいなスワロフスキーのラインストーンが、旧式の二つ折り携帯の表面にびっしり貼りつけてある。ストラップもS学院の女子生徒顔負けで、ビーズ製からちりめんの小さな金魚まで、五本ぐらいぶらさがっている。さらに篠原の手も派手で、長くのばして先端をとがらせた爪には、丁寧にネイルアートが施されていた。色（ちなみに金色）がただ塗ってあるだけでなく、紫の立体的な花までついているのだから、爪というより精緻な細工物の域に達している。

B

片手で煙草を吸いながら、篠原は二つ折り携帯をもう片方の手で振り開け、メールを打ちだした。しづくより速い、と江美利はカントンした。片手しか使っていないのに、指が八本ぐらいあるように見える。

「メル友、いるんですね」

「そりゃあ、ここに入居してる年寄りのなかにも、携帯持つてるひとはいるから。この金魚も、ばあさん友だちが作ってくれたんだよ」

篠原は携帯ごとストラップを振ってみせた。「でも、いまはメモしてるだけ。あたしは日記をつけてるんだけど、あんたが来たことを書いとかないと。夜までに忘れちゃいけないからね」

江美利は少しずつ篠原に接近し、さりげなく画面を覗きこんだ。サイズの大きな文字で、「えすがくいん たけむらさん モールスで来る」と表示されていたが、篠原は老眼らしく、腕を最大限のばした恰好でボタンを連打した。そのたびに、デコレーションされた携帯電話が午後の光を反射する。

C

謎が解けた。江美利は少し気が晴れ、屋上の手すりに歩み寄った。

「うわあ」

海と川と山、江美利の住む小さな町が一望にできる。家があるのは、あの山のあたりだろうか。S学院の校舎は、川と県道をハサんでちょうど正面。一年B組の教室の窓はどれだろう。本来だったら座っていなきゃならない場所を、遠くから眺めているのは妙な気分だ。死後の世界から生者の世界を覗き見ているみたいだ。

では、ここは来世ということか。丘のうえにある、老人ばかりが住む白い建物。

D

江美利はこっそり振り返り、未だ携帯電話と向きあつたままの篠原を眺めた。篠原の姿は、愛敬のある悪魔のようにも、毒気まんまんの天使のようにも、江美利の来世の姿のようにも見えた。

いや、来世ではなく、年月を経た生き物になるべくしてなる貴い形態なのかもしれない。⁴

センスの善し悪し。人形みたいにきれいか冴えないブスカ。そんなのはすべて、あと五十年もしたらどうでもいいことになる気がした。生きているかぎり、だれもが年を取る。男も女も、モテるモテないも関係ない、しわくちやの混沌と化す。

うらやましい、と江美利はつぶやく。しわくちやの混沌と化し、しかし自分の好きなもので身を飾っている篠原が、このうえなく自由な存在に思えた

からだ。

「冷えてきたね」

篠原はメモを打ち終わったらしい。携帯をポケットにしまい、江美利の背中を軽く叩いてうながした。

「あたしの部屋でお茶でも飲んでく？」

「いえ、帰ります。鞆を学校に置いてきちゃったから」

少し残念そうな表情だったが、篠原は江美利を引き止めようとはしなかった。一緒にエレベーターに乗りこみ、エントランスまでついてくる。

「ま、よかったらまた来てよ」

と篠原はエントランスで言った。「ジジババばかりで退屈してるんで」

自分だっておばあさんのくせにと思ったけれど、江美利はもちろん顔には出さず、「はい」と答えた。

「そうだ、あんたどうして元気じゃないの？ そうは見えないけど不治の病？」

「ちがいます。友だちに裏切られたんです」

「裏切り！ コイバナの予感」

慣れない口調で「コイバナ」と言った篠原は、炯々たる眼光ほげほげでにじり寄ってきた。

「大好物だから詳しく聞かせて。じゃないと明日から、よりいっそう執拗しつようにモールス信号送るからね。あんたの成績下がるぐらいぴかぴかさせるよ」

カウンターの奥から、職員が江美利と篠原を見ている。微笑みを絶やしてはいないが、エントランスで押しあいへしあいするさまを不審がつているのは明らかだ。江美利はしかたなく、かたわらにあったベンチに篠原を座らせ、自分も隣に腰を下ろした。今日判明した事実について順を追って説明する。篠原は興味深そうに聞いている。

江美利は説明の最後をこう締めくくった。

「しづくは、かっこいい奥井先輩にふさわしい。本当にそう思ってるし、納得したいんだけど、悔しいんです」

哀かなしくもある。怒りも嫉妬も落胆もある。いままで知らなかった質量で暗黒の感情が胸を満たす。

篠原はといえは、水気のないしわだらけの手で自分の顔をこすった。肩がかすかに震えている。まさか、同情して泣いてくれたのかと思ったが、もちろんそんなことはなく、篠原は笑っているのだった。

「あんたねえ」

ようやく笑いの発作が治まったのか、篠原は両手を膝に下ろした。「だれかと交際したことないでしょう」
いまの話聞いていたらわかるはずだ。江美利は答えずにいた。

「だから⁵そういう妙な考えに取り憑かれる」

と、篠原は断定した。「美男美女同士しか交際できなかったら、人類はとっくに滅亡してるよ。あなたの友だちが先輩とつきあえることになったのは、あんたより美人だからじゃない。タイミングがよかったか、あなたの友だちがあんたに隠れてぐいぐい先輩に迫ってたか、どっちかです」

「しづくは、奥井先輩に告白されたって言ってましたけど……。奥井先輩と、ほとんど話したこともなかったはずなのに」
「それはねえ、容姿が秀でてれば、たしかにそういうこともあるだろうけどねえ」

夢も希望もない。うちひしがれる江美利の肩に、篠原がやさしく手を置いた。

「大丈夫、顔が好みでも性格が合うとはかぎらない！ たぶんすぐ別れるから、そうしたら^{かんげき}間隙についてあんたが先輩に告白しなさい」

なんだか火事場泥棒みたいで、江美利のプライドが許さない。でも、少し気分が上向きになった。江美利は立ちあがり、親身になってくれたのだろう
篠原に礼を言った。会ったことのない祖母とは、こういう存在であろうかと思った。

そういえば篠原は、濃すぎる化粧のせいで国籍不明感がある。フランス人の祖母だと言われても、江美利の疑惑のなかのみで生きる^エカクウの日本人祖母ですと言われても、「そうですか」とすんなり受け入れてしまえそうだ。

篠原もベンチから立ち、江美利とともに自動ドアを出た。

「じゃあ、さよなら」

「うん、またね」

⁶ ややちぐはぐな挨拶を交わし、距離を広げていく江美利と篠原だ。ところが敷地内を八歩ほど進んだところで、

「エミリ」

と篠原に呼び止められた。名乗った覚えはないのにと驚いて振り向くと、篠原はいたずらっぽく笑っている。

「たいがいのひとは交際も結婚もいつかできるものだから、あせなくていいよ」

「いつまで経ってもできなかったら、どうするんですか」

「そのころには諦めもついているから、問題ない」

篠原は急に真剣な顔つきになって、言葉をつづけた。「そんなことより一番の問題は、悔いのない、だれに恥じることもない生きかたを死ぬまででき

るかどうかだと思っただけど、ちがう？」

そう言われれば、そんなような気もする。でも江美利にはよくわからない。奥井先輩とつきあえれば、悔いのない幸せな時間を過ごせるのにも思いいも拭ぬぐいがたくあるからだ。

とりあえず篠原に軽く手を振り、江美利は「ルミエール聖母の丘」の門を出て、坂道を下っていった。

どうして私の名前を知っていたんだろう。パパだって幼いころに別れたきりで、ほとんど顔を覚えていないという、私のおばあさんだったりして。受付の名簿を横目で見たとか、種明かしはそんなところのような気もする。でも、おばあさんかと思っておくのは、ちょっといいかもしれない。フランス人なのか日本人なのか、パパの出生にまつわる私の疑惑は、あいかわらず晴れないままだけれど。

そんな考えを抱きながら丘を下り、川を渡り、学校へ戻った江美利は、担任にもものすごく怒られた。家にまで電話が行っていて、学校に駆けつけていた母親は、半分泣きながら職員室で江美利を抱きしめた。気まずさここに極まれりだ。江美利と行きがちになってはいけないということで、父親は家で留守番をしており、あとで判明したところによれば、不安からムンクみたいな絵を描いてしまったのだった。そのとき取りかかっていたのは、大手のおもちや屋さんの包装紙に使う、「明るくポップな色調で」と依頼された絵だったのだが。

担任が江美利の鞆を教室から取ってきてくれたので、その日はしづく顔と顔を合わせずに帰った。

翌日から、江美利の毎日はなにも変わらなかった。自身の予想どおり、登校してすぐ、「ごめんね。応援してる」としづくに言い、しづくもまた謝って、二人でちよつと泣いた。それでおしまい。江美利はたまに、しづくと昼休みを過ごす。ほとんどの日は、しづくと奥井先輩にエンリョオして一人で弁当を食べる。帰宅したら父親とハグし、美顔ローラーを片頬につき五十回ずつ転がし、サムエル※1と遊び、母親を手伝って夕飯の仕度をする。

地味だし、ブスだし、携帯も買ってもらえていないままだ。

でも、授業中に窓の外を眺めていると、丘のてっぺんで篠原のデコレーション携帯が輝く。明滅は江美利に呼びかける。

「け、んぎた、すか」

「元気ですか」に江美利が文句をつけたからか、あれ以来篠原は「元気出すか」と微妙に文言もんごんを違たがえてモールス信号を送ってくる。たぶん、「元気を出すか、うん、出そう」といった自ア自イのニュアンスをこめた、「元気出すか」なのだろう。もしかしたら「だす」は、「です」がちよつとなまった「だす」なのかもしれないが。その場合だと、「元気だすか？」ということか。なんとなく気の抜けた感じだ。

篠原からのモールス信号を受け、江美利は「ルミエール聖母の丘」を訪ねることもある。いつ会っても篠原は派手な恰好で、好き勝手にしゃべる。

世界史の授業はようやくローマ五賢帝時代に突入した。フクちゃんの声を子守歌に、江美利は机に曲げ置いた腕に頬をつける。つつぶして顔だけ窓に向け、丘のてっぺんと空を眺める。

8 江美利は自分だけに向けて発せられる合図を待っている。そしてそろそろ、自分からも合図を発してみてもいいかなとも思っている。

(三浦しをん『てっぺん信号』より 改変した部分があります。)

※1 サムエル：江美利の家の飼い犬

問一——ア～オのカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問二——「炯々たる」の本文での意味として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 うっすら涙ぐんでいる
- 2 気がかりで不安である
- 3 鋭く光り輝いている
- 4 疑って様子をうかがっている

問三 本文には次の一文が抜けています。どこに入れるのがふさわしいか、本文中の

A

～

D

 の中から選び、記号で答えなさい。
「そうか、きらつきらの携帯を利用して、モールス信号を発信してたのか。」

問四——1 「いまの江美利はなげやりだ。こわいものなしだ」とあるが、それはなぜか。最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 江美利が先輩を好きなことを知りながら、先輩と付き合うことにしたしづくの本心がわからず疑心暗鬼になっているから。
- 2 江美利の先輩への気持ちに気づきながら、自分を出し抜いて先輩と付き合うことにしたしづくの行為に意気消沈しているから。
- 3 江美利から先輩への思いを聞いているのに、先輩と付き合うことを決めたしづくの裏切り行為に対して周章狼狽しているから。
- 4 江美利の先輩への気持ちを知りつつ、先輩と付き合い始めたと言うしづくの告白に衝撃を受けて自暴自棄になっているから。

問五——2 「信じられない」・——3 「信じられない」とあるが、何に対する感想か。それぞれ二十字以内で答えなさい。

問六——4 「年月を経た生き物になるべくしてなる貴い形態」とあるが、江美利は篠原のどのような点を「貴い」と捉えているか。五十字以内で説明しなさい。

問七——5 「そういう妙な考え」とあるが、それはどのような考えか。本文中の篠原の言葉を使って二十字以内で説明しなさい。

問八——6「ややちぐはぐな挨拶」とあるが、二人はどのような気持ちで挨拶したのか。二人の気持ちの説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 江美利は信号の送り主が見ず知らずの老女であることに驚きを隠せず、早くこの場を去ってしまいたいという気持ちで区切りをつけようとしているが、篠原はやつと出会えた少女に嫌われないようにほどこに應對しながら次回の来訪を期待している。
- 2 江美利は信号の送り主を確認することができたし、自分の怒りも吐き出すことができたのですっきりとした気持ちで別れを告げることができ、篠原は信号を送り続けた相手に会えたうれしさをまた味わいたいと思う気持ちで江美利の再来を望んでいる。
- 3 篠原は二年間の努力が報われただけでなく、若い少女と話ができたことに満足して別れを言えることができているが、江美利は信号の送り主がわかったおかげで不愉快な気持ちに収まりが付き、社交辞令で再び訪ねるように言うことはしていない。
- 4 篠原は自分の信号を受け止めてくれたうれしさはあるものの、歳の違う相手への対応に少し困って別れの挨拶をしているが、江美利は信号の送り主に予期せぬ形で会えただけでなく、自分の悩みを聞いてくれる老女に好意を抱いてまた訪ねようと思っている。

問九——7が四字熟語になるように、・に当てはまる漢字をそれぞれ答えなさい。

問十——8「江美利は自分だけに向けて発せられる合図を待っている。そしてそろそろ、自分からも合図を発してみてもいいかなとも思っている」とあるが、この時の江美利の気持ちの説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 自分にだけ向けられる励ましの合図を素直に受け止め、篠原の少し屈折したやさしさに触れながら、次の一步を踏み出してみようという前向きな気持ちになっている。
- 2 退屈な学校生活の中で特別な合図にわくわくしながら、自分からも積極的に行動を起こしてありふれた日常から抜け出そうという強い気持ちを持ち始めている。
- 3 地味な自分に向けられるきらきらした合図に触発されて、今までの自分の殻を破ってあらたな自分になってみたいと期待する気持ちにあふれている。
- 4 自分に向けられる好意的な合図をただ待っているだけでなく、篠原のいる丘に自分から出かけていく勇氣を持ってもいいものか少し迷う気持ちでいる。

問十一 「篠原」という老女は江美利にとってどのような存在か。「篠原」の説明として最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 派手な化粧や服装は仮の姿で本当は心やさしく人の痛みがわかる人物であり、江美利の失恋の哀しみや落胆を慰めつつ親身になって相談のつてくれる、田舎の祖母のような存在。
- 2 身なりや持ち物は派手だけれど恋愛観や人生観はとても常識的で、江美利の怒りや嫉妬する気持ちに深く理解を示しながら的確なアドバイスをくれる、昔気質な祖母のような存在。
- 3 言葉や態度は無神経のように見えるけれども見ず知らずの江美利をやさしく受け入れ、落ち込んでいる気持ちにさりげなく寄り添い励ましてくれる、遠く離れたところにいる祖母のような存在。
- 4 年齢に似合わず女子高生のように流行や恋に敏感で、突然訪ねてきた江美利をためらいなく招き入れて話し相手にしてしまう不思議な魅力を持つ、あこがれの異国にいる祖母のような存在。

問題は次のページにつづきます。

【四】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私と他者との関係性は「先人たちの世界」だけではないし、私はつねに過去を振り返って生きているわけでもない。私は「いま、ここ」でつねに新たにセイキする現在のなかで、私以外の人間、つまり他者とともに生きている。

「いま、ここ」を中心として無限に広がっていく現在の世界。そこにはまず、私とあなたの直接的な関係があり、私とあなたが作る「直接的な現前の世界」がある。さらには普段出会う頻度はそれほどでもないし、その関係性のありようも異なる、より匿名的な彼らも含めた「彼らの世界」がある。この「彼ら」も、私との関係の密度により、濃淡の序列がついている。

たとえば高校時代、毎朝の通学電車にほぼ必ず同じ時間、同じ車両に乗る女子学生がいたとする。私が彼女に特に好意をもっていなければ、その制服や校章を見て「ああ、〇〇高校か」と思うだけだ。他にも多く乗っている乗客の一人として以上の意味を見出す必要はなくなり、私は窓の外を流れる決まりきった光景に目を移すだろう。

A、その女子学生が私の非常に近い場所に触れ合うか否かの状態で立っていたとしても、「乗客」「女子高生」という類型として了解すれば十分であり、匿名的な「彼ら」以上の存在ではない。

しかし、もし私がその学生に好意をもてば、事情は確実に変わってくる。彼女は「乗客」「女子高生」という匿名的な「彼ら」のなかの一人ではなくなり、彼女がどういう存在かを私は詮索したくなるはずだ。校章を見て「〇〇高校」の生徒だとわかっただけでは満足せず、「〇〇高校」と私が通う高校とのつながりをあれこれ考え、その女子学生に語りかけるきっかけを探そうとするかもしれない。毎朝彼女を観察し、彼女も私のことが気になっていないか、何か手がかりを見つけようとするだろう。

つまり、成功するかどうかはともかく、私は、私を含めた「乗客」という「彼らの世界」から、私とその女子学生の存在を際立たせ、私とあなたという「直接的な現前の世界」で交信可能な関係性を模索しようとするのだ。

また、私たちは、自分が死ぬまでに一度も会うことはない、その意味でまったく匿名的な存在が同時代を生きていることも知っている。シュツツはそれを「同時代人の世界」という。

先述の「彼らの世界」を理解しようとするとき、私たちは「類型的な知」²「処方箋的な知」を「あたりまえ」のように用いる。

先の女子学生のケースについても、私はなぜその存在を女子学生だと了解できたのか。

それは彼女の外見を見て、私のなかにある類型的な知を瞬時のうちに作動させたからだ。彼女の制服の着こなしやカバンの厚み―カバンが糸で縛って

あり、ぺちゃんこになっているか否か、体操服などを入れておく袋にどのようなアクセサリーがついているか等、いわゆる「女子学生」に付随した類型的な知や、彼女たちと出会うときにどのように対処すべきかを教えてくれる処方箋的な知を、私はクシ[↑]していたのだ。

そして、こうした類型的な知は「同時代人の世界」を理解するうえでも必須だが、そこには、より凝縮されたかたちで知の偏りや決めつけが生きている。

たとえば、丸メガネをかけ、出っ歯で、一眼レフのカメラを首からさげ、キツネ目をして笑っている男性の姿。その背景にはフジヤマが描かれ、芸者姿の女性が立っていたりする。日本人旅行者をからかい、戯画化した典型的な漫画だ。

いまだきそんなものがあるのかと思うかもしれない。 B、ネット環境が全世界規模に拡大し、正確かつ詳細な情報が瞬時に流通するようになってい

る現在でも、確実に生きている「典型的な日本人」の姿なのである。

こういう例を持ちだすまでもなく、自分の恥ずかしい思い出を語るだけで、「同時代人の世界」を理解するうえでの問題点が露^ウわになる。かつて私のなかにも典型的な「アメリカ人＝白人」イメージがあった。だが、初めてアメリカを訪れたとき、「アメリカ人＝白人」などという均質な現実などないことを実感した。

ロサンゼルス国際空港に到着し、空港内のアナウンスが五カ国語で行われていたことに驚き、空港を行きかう人びとの肌の色の多様さに驚いた。英語を話す白い肌の「アメリカ人」ばかりいるはずもない。少し考えてみれば、あたりまえのことなのだが、少なくとも私のなかで、典型的な「アメリカ人」のイメージが生きていたことは確かだった。

何かの機会にその土地を訪れ、そこで暮らしている人びとの現実を垣間^{かいま}見ることができれば、こうした典型的なイメージは修正されていくだろう。自分の目や耳など五感を働かせることで、人びとが生きるリアリティを少しは感受できるからだ。しかし、多くの場合、そのような機会はまれであり、私たちの日常では、一定の偏りや強調、歪^{ゆが}みなどをともなう典型的なイメージをもとにした「同時代人の世界」が息づいている。

そして、こうした歪みや強調、過度に一般化され、戯画化されたイメージは、メディアのニュース報道などで反復され、私たちに微細⁴ではあるが確実な権力として行使されているのだ。

たとえば近くて遠い国である北朝鮮に関するメディアの報道では、どんな内容のニュースであれ、参考映像として金正日や金正恩がこちらを指差し、何かを大声で叫んでいる姿が映しだされる。「この国は、こんな感じですよ」といわんばかりにニュース映像の冒頭に置かれ、私たちがその報道内容をどのように理解すればいいかを方向づけるのだ。

また、私たちは、これまで生きてきた人やいま生きている人とのつながりだけで暮らしているのでもない。つねに「未来⁵を生きるであろう人びとの世

界」ともつながっている。

東京電力福島第一原発事故によって、放射線、放射能、放射性物質という「異物」が私たちの日常に^{※2ちゃんねる}闖入してしまった。事故当時は、「今日の放射線量」が天気予報のようにニュース番組で報じられる日常が反復した。最初は真剣に放射線量の被害について考えながら見ていたのに、次第に、明日の天気を見るのと同じような感覚で確認するようになっていく。私は、自らの感覚がしだいにマヒしていく恐ろしさを感じていた。

その一方で、線量計を自ら入手し、公園や学校など身近な場所を測定する母親の姿がメディアで伝えられる。彼女たちは、放射線が子どもにどのように影響するのか、本気で心配している。そして彼女たちの視野には、自分たちの子どもだけでなく、これから生まれてくるであろう子どもたちのことも入っているはずだ。私たちの前には、「未来を生きるであろう人びとの世界」が果てしなく広がっているのである。

原発事故による放射能汚染の問題だけではない。私たちはなぜ、環境問題について考え、その対策に取り組もうとするのか。そこには「未来を生きるであろう人びと」に、地球環境を少しでもいい状態で残すという環境^エリンリがあり、「いま、ここ」を生きる私たちがもつ、未来の「見知らぬ彼ら」への責任感の現われなのである。

私は、過去・現在・未来を生きている他者たちとつねになんらかのつながりを感じ、つながりをつくり、それぞれの次元に対応する多元的・多層的な世界との関連性のなかで、日常を生きている。 C、こうした「人びとの世界」と関連する意味を生きている私が立っている原点が、「いま、ここ」という現在なのである。

三次元の空間に加え、時間や歴史性も含めた四次元座標のゼロ点としての「いま、ここ」という現在こそ、私が日常を生きるうえでの原点であり、「日常を生きる」私の姿を、自ら反省・^{はんすう}反芻し得る手がかりになる。

「いま、ここ」という現在から、全時間的、全方位的に他者とのつながりを見ることができるといふ主張は、あたりまえのことと思われるかもしれない。だが、大学院生だった私は、このあたりまえの事実を、きちんと理路整然に説明するシュツツの日常生活世界論の^{すじ}凄さに興奮したのだ。

「いま、ここ」という現在は、次から次へと新たな現在へと移っていくが、これは、日常生活世界において、私が多様な位相や次元を生きている他者と出会い、つながる、もつとも力に満ちた場であり、私を中心として広がる多元的な生活世界の意味を反省する原点である。

言いかえれば、あなたという他者と向き合い、交信しようとするコミュニケーションのゼロ点でもある。私は「いま、ここ」で、そして「いま、ここ」から、世界へ立ち向かおうとする。同時に、私は「いま、ここ」で他者と出会い、さまざまな現実をつくりだそうと格闘するのである。

私があなたと対面するとき、私はあなたが発する言葉や感情、表情や動作、身体のあるりようを含め、すべてを感じ取る可能性に満ちている。それは、私があなたへ、同じ可能性を放出していることでもある。こうした、いわば単純な事実こそ、「いま、ここ」で私があなたと充実した意味を創造するた

めの基本なのである。

もちろん、あなたと直接対面したからといって、あなたのすべてが理解できるわけではない。あなたの背後には、「あなたが生きてきた、これから生きるであろう生活世界」が無限に広がっている。それをすべて感じ取り、理解するのは、不可能だろう。

シユッツの日常生活世界論から考えるとき、いや、そのような理論にイキ^オキ^オせず、私という人間が日常生きている実感から考えても、「いま、ここ」で私があなたと出会うこと、向き合うことは、決定的に重要なのである。

では、「いま、ここ」で、私があなたとコミュニケーションすることの重要性とは何だろうか。

それは、あなたのすべてがわかるということではない。そうではなく、それは、目の前にいるあなたを理解したいが、あなたのすべてを理解できるはずもないことがわかったうえで、目の前にいるあなたを手がかりとしながら、あなたとつながりたいという、つねに現在進行形の営みである。またそれは、ある手順や段階を踏めば、あなたへの理解が完了するという「終わりのあるゲーム」などではけっしてない。こうしたことを私が実感し、あなたも実感しつつ、「いま、ここ」をどう生きるかということが重要なのではないだろうか。

(好井裕明『違和感から始まる社会学 日常性のフィールドワークへの招待』より 改変した部分があります。)

※1 シユッツ：アルフレッド・シユッツ（一八九九～一九五九年）。社会学者。

※2 闖入…ことわりもなく突然入り込むこと。

問一 —— ア～オのカタカナの部分に直し、漢字の読みをひらがなで記しなさい。

問二 ——

A

く

C

 に入る語の組み合わせとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- | | | | | | | |
|---|---|------|---|------|---|------|
| 1 | A | また | B | いわば | C | あるいは |
| 2 | A | なぜなら | B | もしくは | C | だから |
| 3 | A | つまり | B | しかし | C | そして |
| 4 | A | すなわち | B | けれども | C | そもそも |

問三 —— 1 「この『彼ら』も、私との関係の密度により、濃淡の序列がついている」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 現在全く名前を知らない相手だとしても、自分の関心の持ち方によって、関係性を模索するかどうかが変わってくるということ。
- 2 現在相手とのつながりが全く存在しなくても、相手からの働きかけの有無によって、つながりを検討する対象になるということ。
- 3 現在親しみを感じない存在だとしても、相手との交流の頻度によって、その人との関わり方が徐々に変化してくるということ。
- 4 現在まで会ったことのない相手だとしても、相手に対する自分の興味の持ち方によって、自分の意識も変化するということ。

問四 —— 2 「類型的な知」とあるが、それをを用いることの効果を説明したものとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

- 1 一般的ではない視点で他者を理解するのに役立つこと。
- 2 見ず知らずの他者の特性を把握するのに役立つこと。
- 3 好意を持つ他者との距離を縮めるのに役立つこと。
- 4 瞬時に他者の正確な情報を理解するのに役立つこと。

問五 —— 3 「『同時代人の世界』を理解するうえでの問題点」とあるが、それはどのようなことか。そのことを説明した以下の文の を三十字以内で埋めなさい。

私たちが世界を理解するときには ということ。

問六 —— 4 「確実な権力として行使されている」とあるが、それを説明したものとして最も適するものを次の中から選び、番号で答えなさい。

1 ニュース報道において、メディアが伝えたい情報やイメージをあらかじめ伝えることで、視聴者がニュースの内容を理解しやすくなり、その報道内容を印象に残すように誘導していくこと。

2 報道したい対象をあらかじめ選別し、伝えるニュース内容を規制することで、視聴者から様々な情報を得る機会を奪い、自分で情報を取捨選択する能力を失うように仕向けること。

3 報道対象についての情報を大量に放送することで、その報道について視聴者が様々な感想を持ち、報道対象についての議論がさらに過熱していくように人々を仕向けること。

4 ニュース報道などにおいて、その対象についての一般的なイメージをメディア側が選び、そのイメージに沿った映像を視聴者に繰り返し見せることで、その報道をどのように理解するかを誘導していくこと。

問七 —— 5 「『未来を生きるであろう人びとの世界』ともつながっている」とあるが、その具体例として適していないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1 現代まで伝わっている芸術作品を後世でも見られるように、美術館では作品の修復を随時行っている。

2 自分たちが卒業した後にこの教室を使う後輩たちが快適に過ごせるように、生徒たちは教室を大切に扱っている。

3 将来的には宇宙エレベーターが開発され、気軽に宇宙旅行ができる時代の到来を人々は今から楽しみにしている。

4 これ以上犠牲者を増やさないために、カンボジアでの地雷除去のボランティアに参加する動きが世界的に広まっている。

問八 本文について説明したもので、合っているものには○、間違っているものには×をそれぞれ記しなさい。

- 1 我々は既存の知識を使うことで対象を理解するが、新たな情報によって既存の知識が更新されて、対象を新しい捉え方で見ようとする拒む傾向にある。
- 2 私たちは他人を理解する時には類型的な知を使って捉え、どのような対応をとればいいかを考える時は処方箋的な知を使って決めようとする。
- 3 「彼らの世界」に属する人物に対する関心が薄れた場合、その人との関係が別次元の世界に移行してしまい、結果的にその人とは疎遠になってしまう場合がある。
- 4 現在では正確な情報が世の中に多く流布しており、典型的なイメージの中に含まれる誤ったイメージを自分で修正することは容易になっている。
- 5 他者への理解には終わりが無いことを踏まえつつ、「いま、ここ」という自分のコミュニケーションの原点で他者と向かい合うことが重要である。

(問題は、これで終わりです。)





